



住まいづくり・
まちづくり
なでしこ
インタビュー

第 11 回

住まい・まちづくり分野でご活躍されておられる女性に、携わっておられるお仕事や女性ならではの視点についてインタビューによりご紹介します。

インタビュアー **常盤 桃子**

住宅金融支援機構 四国支店 地域営業グループ

2014年慶應義塾大学大学院理工学研究科修士課程修了、住宅金融支援機構入構。
2014年4月、同機構CS推進部住宅技術情報室に配属。
2017年4月より現職。主に徳島県及び香川県の営業を担当。



神山つなぐ公社の挑戦



一般社団法人 神山つなぐ公社
すまいづくり担当

赤尾 苑香 様

(あかお そのか)



一般社団法人 神山つなぐ公社
コミュニティ・アニメーター

高田 友美 様

(たかだ ともみ)



一般社団法人 神山つなぐ公社
ひとつづくり担当

森山 円香 様

(もりやま まどか)



認定特定非営利活動法人グリーンバレー
移住交流支援センター担当

伊藤 友宏 様

(いとう ともひろ)

神山町は徳島県のほぼ中央部に位置し中山間地の過疎の町である。ピーク時(1950年)の人口は、21,000人超だが、2015年の国勢調査では5,305人。

そのような神山町が2015年末に「神山町創生戦略、人口ビジョン まちを将来世代につなぐプロジェクト」をまとめた。その内容は以下のように具体性に富んでいる。

- ①人口減少を容認しつつも2060年頃には3,200人程度で均衡させる。そのためには自然動態での転入数約113人に加えて、小さな子供を含む毎年44人程度の転入を目標にしている。(これにより小中学校の学年別クラス編成が維持できる。)
- ②7つの施策領域を設定し、取り組む。
(すまいづくり・ひとつづくり・しごとづくり・循環の仕組みづくり・安心な暮らしづくり・関係づくり・見え

る化)

- ③実施体制としては、2016年に神山つなぐ公社を一般社団法人として設立し、柔軟な発想や手法で必要な施策推進を迅速に手がけていく。また町役場の課長級職員とつなぐ公社職員が隔週で開かれる神山町つなぐ会議で連携をとりながら進めることとしている。

もともと神山町では、20年以上前からNPO法人のグリーンバレーが「日本の田舎をステキに変える！」というミッションのもと、

- ・「人」をコンテンツにしたクリエイティブな田舎づくり
 - ・多様な人の知恵が融合する「世界のかみやま」づくり
 - ・「創造的過疎」による持続可能な地域づくり
- というビジョンを掲げ、移住支援や空き家再生、神山塾、

IT関係のサテライトオフィスの誘致など様々な取り組みを実施し、全国から注目され視察が絶えない状況になっている。

前述した創生戦略は、2014年に制定された「まち・ひと・しごと創生法」において都道府県及び市町村において地方版総合戦略の策定に努めることとされていることに基づき、神山町においても策定されたもので、その実施主体として神山つなぐ公社が設立された。

公社は町役場や地域内外から参加した専門家の方など多様なメンバーで構成されている。今回、その中で、すまいづくり、ひとづくり、関係づくりを担当されている女性職員の皆さんとNPOにおいて移住・空き家再生などを担当している方に対しお話を伺った。

一 皆さまはどのような経緯で、神山で今の仕事につかれたのでしょうか。

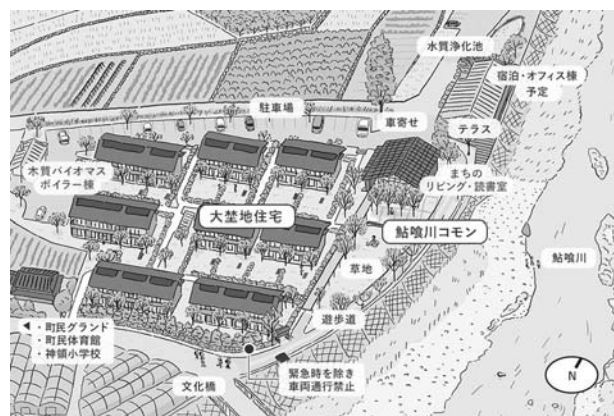
赤尾さんは地元の方とのことですが。

赤尾 10年勤めてた徳島市内の建築設計事務所を退所して、公社へ来る1年前に神山町の自宅で事務所を始めました。これまで神山に住んでいながら、町の動きをほとんど知らなくて、建築の仕事をしていながら、自分の育った町のことを知らないことが恥ずかしく感じていました。独立と同時に、いつか神山の町の仕事に携わっていったらと思っていたところ、独立して半年後くらいのときに現公社の榎谷代表と西村理事から声をかけていただきました。

来年から建築のプロジェクト^{※1}が進んでいくので一緒にやってみませんか、というお誘いをいただき、参画を決めました。

※1：神山町では以前中学生の寄宿舎が建っていた場所に、木造で20戸の町営の賃貸住宅等を建設中。現在いる人、帰ってくる人、移ってくる人すべてを対象に、地場産材を活用し地元の大工さんで造る。地域の交流の拠点としての機能を備える。

町営の集合住宅プロジェクト



高田さん、森山さんは県外から神山に移住されてきていますね。

高田 私が来たときはちょうど公社が立ち上がる時期でした。ちょうど転職を考えていたタイミングで町内で人材募集を兼ねた2泊3日の滞在型のイベントがあり、神山の最近の様子を知ることができたら、と思い参加しました。そこで根本的に町の将来を考えながら動き始めている状況を聞き、面白そうだなと純粋に感じました。他の選択肢もあり、悩んだのですが、お誘いいただいて、3年働いてみることを決めました。

森山 私は公社ができる前の、神山町が戦略を策定する時から関わり始めました。その計画^{※2}を推進する母体として、公社を立ち上げるということで、事務局のスタッフとして参画しないかというお誘いがあったので、公共と民間の可能性を探るといった部分に魅力を感じました。前職が教育畑だったので、教育のプロジェクトを担当するということになりました。

移住を決断するにあたっては、役場の人や地元の若手の人たちに非常に面白い方々が多くて、推進する力があるというか、今の環境を良くしていこうというエネルギーを感じたというのが一番の大きな決め手でした。大きな課題を解決しなくちゃというよりは、楽しみながら解決していけばいいんじゃないといういい感じの緩さがあったのがとても印象に残りました。

公社の職員としての任期は3年ですから、その先のこ

とはまだ分かりませんが、ひとまず3年を区切りとして考えているところです。

※2：計画は神山町が策定した「まちを将来世代につなぐプロジェクト」

高田 私も3年契約として町に来ましたが、現時点で1年半が経過して、ようやく集合住宅プロジェクトが動き始めたところ。これから3～4年かけてつくっていく予定です。入居が完了してもう一つフェイズが移行するところまで見届けるところまでは関わりたい、と今は思っています。

— 公社とNPO法人グリーンバレーとの関わり方はどのようになっているのでしょうか。

伊藤^{※3} グリーンバレーも公社の立ち上げに協力していますが、立ち上げ後はそれぞれ独立して活動しています。今は必要に応じて、プロジェクトごとに連携を取っています。

私はグリーンバレーの移住交流支援センター^{※4}の担当として、公社主体の民家改修チームに参加しています。

移住に関してはグリーンバレーがメインで行っています。移住に関わる窓口は、町からの委託を受けて、できるだけワンストップでサポートするようにしています。

NPOグリーンバレー理事長の大南は、実行部隊として活動しているプレーヤーが自ら名乗りをあげて参加するプロジェクトは進みが良い、とよく言っていますね。

※3：奈良県出身で大阪の大学を卒業後、神山塾に参加。その後、NPO法人グリーンバレーに就職。移住交流支援センター担当。

※4：神山町移住交流支援センターは、神山町からNPO法人グリーンバレーに業務委託されている。

— 公社における住まいづくり活動について教えてください。

赤尾 民家改修プロジェクトに関しては、現在、すみはじめ住宅を町の7つの地区につくっていくこうとしています。

シェア型のすみはじめ住宅「西分の家」



すみはじめ住宅は、転入を考えている方が中長期にわたってこの家に住みながら借りられる家を探したり、仕事を試みたりと、町に住み始めるための準備が出来る家です。

すみはじめ住宅は2軒目が近々完成するところです。

民家改修プロジェクトでは、町役場の移住担当者とNPO法人グリーンバレーが運営する移住交流センターと公社で提供できる空き家の発掘も進めています。現在借りられる住宅は少なくなってきていますが、これから先も空き家は増えていくだろうし、老朽化が進まないように、老朽化が軽度な物件の改修もしていけたらと思っています。

高田 集合住宅プロジェクトでは、集合住宅が単なる入居者のためのものだけではなく町の人にとってもそれがあることで何か良い変化をもたらし場所にしたと思っています。文化施設を造って町のいろいろな人が使える場所も企画しています。ただ箱を造るのではなくその運用も含めて何をすべきかを考えています。

入居者の募集や選考においては、地元に戻ってきたい人にかに知ってもらえるかなど発信の仕方を考え、入居希望者全員と面接して選考を行っています。起こってほしい変化を入居者の組み合わせによってどのように実現できるかということを地元の人たちと相談しながら考えています。

2019年の夏から秋に文化施設がオープンします。その時に、地元の人でも立ち寄りやすく、いろいろな世代の人

が混じり合うような場になっていけるような仕掛けはないかなということを検討しています。その前段階の実験的な試みとして、「西分の家」(1軒目のすみはじめ住宅)には共有スペースもあるので、地元の人にどうしたら立ち寄ってもらえるかなど活用方法を模索しています。

集合住宅計画の大前提のテーマとしてあるのが、子どもたちの放課後・休日環境。今は学校が終わると、スクールバスで離ればなれの場所に送り返されてしまい、そうするとひとりで家で過ごすことになります。最近では兄弟も少なく、家の中でテレビやゲームという遊び方になっており、この神山の雄大な自然の中で遊んでみよと思っても遊べなくなってしまう。子どものための環境作りを考えたときに、入居者の子どもだけではなくその入居者の子たちの所に遊びに来ること、親や先生とも違う大人と新しい出会いが広がったりすること、自分なりに探求したいことを調べることで、こうした体験はきっと大人にとっても世界が広がるきっかけになると思いますね。

赤尾 昨年(2019年)の11月、東京大学の犬塚教授に鮎喰川すまい塾に来ていただいて勉強させていただきました。お話を伺って、町内でどのような住まいの選択肢を用意していくか、ということを町として長期的に考えていく必要がある時期に来ていると思っています。

鮎喰川すまい塾



一 公社におけるひとづくりについてお教えください。

森山 ひとづくりといっても範囲がすごく広いので、その中でも私は特に子どもに特化して取り組んでいます。町は人口減少が進んでいる中で、特に、子どもの人数が減少してきているのが大きな課題です。町内に唯一ある農業高校はこのまま何もしなければ数年後には廃校という可能性もあります。

高校は県の管轄であることもあって、まちからはやや隔絶した存在と見られていましたが、神山の自然環境やまちの人たちの取り組みを学べるように、地域学という授業を、今年度からスタートさせました。

農業高校の生徒の9割がバスやバイクで町外から通学しており、あまり町のことを知りませんし、ましてやメディアで町が取り上げられていることをほとんど知りません。山の奥に来ているという感覚の子もいます。しかし実際には面白い大人たちがいて新しい仕事生まれていますし、豊かな自然環境から学べることは沢山あります。そういったことを自分たちの目と耳と肌で感じて欲しいと思っています。サテライトオフィスなど施設を見学したり、山に登って名所の滝を見たりしています。

城西高校神山分校での神山創造学の授業



一 持続的な地域づくりで大切なことは何ですか。

赤尾 町に若手の大工さんはいるのですが、町内の仕事

が少ないため町外に働きに行ってしまう状況がありました。そこで、民家改修プロジェクトでは、若手の大工さんと一緒にやっという考えました。昔からの技術を施した民家を改修することで技術継承の機会にもになり、後続世代の育成につながると思います。地域内の経済循環や後継者育成が、仕事づくり・ひとづくりにもなっていくのだと思います。

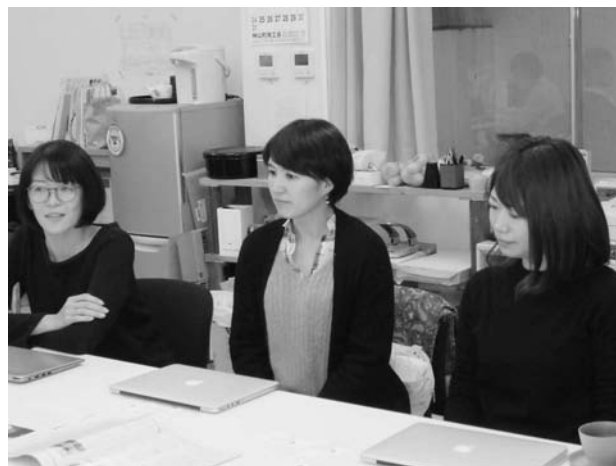
かつて神山町は林業の町として栄えてきましたが、外材が多く使われ始めるようになってから、神山の木の利用は減少してきました。昔は林業を営む家もありましたが、現在は激減しています。林業や山の課題に対してどのような手段で切り込んでいくか、町の林業の担当者も悩んでおられます。集合住宅プロジェクトで使用する木材は、神山町の森林面積からすると微々たるものですが、まずは町産材を使用することから始め、神山の林業や山に目を向けてもらえたらと思います。

伊藤 今では道路が整備されたことで、買い物に町外まで出る人が多いです。隣町にある大型スーパーには車で30～40分ほどで行けてしまい、1週間に1回などまとめて買い物もできるでしょう。しかし、それでは地元で商売をしている方々は疲弊していくので、そうではない地域内でお金が回るよう少しずつ実現していきたいと思っています。

高田 町の人口ビジョンでは、現在約5300人いるのを将来約3200人で均衡させたいという計画の立て方はすごく面白いと感じました。人口の規模を維持することではなく、今から2000人位減ることを受け入れた上で、例えば若い世代をこれくらい受け入れなくてはならない、それができるにはどうしたらいいのかという発想はパラダイムシフトだと思います。

ここ1年ほど町民町内バスツアーというものをしていきます。地元の方々に人口ビジョンや新たな動向について話すと、普段そういう発想がないおじいちゃんやおばあちゃんにこのままどうもいかないんだという現実を知ってもらい、一方では若い人たちや移住者がこんな想いでこんな風に頑張っているんだということにも気付いてもらってます。すると、今は便利だから徳島市内だと

か隣町に買い物に行っている人も、多少高くても地元でちょっと買い物してみようかな、子どもが帰ってきたらご飯を食べに行こうかなとか、少しずつ意識や行動が変わっていくのではと思っています。



一 最後に、住宅金融支援機構へのご要望をお聞かせください。

赤尾 町では住まいのプロジェクトの中に掲げてる住宅ローン等の整備についてはこれからという課題です。住宅ローンの必要性というところは、1年半やってきた中で必ず見えてくるでしょう。

高田 住宅政策の勉強会の時に、資金計画のことも話題に出ました。住宅ローンをどのように活用させていくか今後考えていきたいと思っています。

赤尾 今は改修がメインですが、新築を建てたいという声も耳にします。

伊藤 神山は住宅の流通が少なく、不動産会社もありません。今は定期借家物件に、借主がお金と時間をかけて修復するケースが多いです。

～インタビューを終えて～

短い時間であったが、3名の女性プラス1名の男性の町に対する熱気が伝わってきた。一見すると全国どこにでもある過疎の町である。しかし、20年以上前に取組み始めた様々な取組みの一つの到達点として、また、将来を見据えて、神山つなぐ公社ができたのだと思われるし、

このまま人口減が続くと消滅しかねない状況を必ずや打開して見せるとの強い意志が感じられた。しかしそのためにシャカリキになっているようではない。あくまで住民、戻ってきた人、移住してきた人、通学する学生などとコミュニケーションを密にし、地域の一体性を重視しつつ皆の力で成し遂げようとしている、地に足の着いた取組みが厚みを増そうとしている。さらにこれからの神山に注目したい。

